

シリーズ 技をつなぐ

上川の名匠

第92回

システムエンジニア

佐々木雄大さん(32)



略歴 昭和59(1984)年6月、旭川市生まれ。旭川東栄高校を卒業し、進学したが、20歳の時に旭川高等技術専門学院電子工学科(現・システム制御科)に入り直し、卒業後、札幌のシステムエンジニアリング会社に入り、主にシーケンス制御を担当。27歳の時に父・通彦さんが経営する機エフ・イーに入社、システム制御課に配属され、技術営業を担当。昨年、常務取締役就任、現在に至る。趣味・スポーツは、「最近始めたばかり」というゴルフ。

私 たちの暮らしにこれだけ浸透している今の時代でありながら、1990年代に始まるPLC(プログラマブル・ロジック・コントローラ)技術を利用したSE(システムエンジニア)という仕事を、果たしてどれだけの人がイメージできただろうか。それぐらい、この仕事は一般に馴染みが薄い、今や日本の各

種の製造現場などで必要不可欠な存在になっている。具体的には、あらかじめ定められた順序、条件に従って各段階を逐次進めていく、シーケンス制御という考え方に基づき、工場の製造機械や製造ラインに、命を吹き込む作業がこれに当たり、「何よりもまず、現場の人たちの使い勝手の良さが求められ、作業の効率化によるコスト削減や安全確保などもテーマになる」。

SEの仕事は、一定水準以上の技術力が基本条件となる分野だけに、旭川でこの仕事に携わる人は、まだごく限られているという。

それぐらいこの仕事に参入する場合、ハードルが高いということだが、「制御プログラムを作成することによって、自分が頭のなかでイメージしたように、その機械を動かすことが

できた時は、本当に楽しいし、やりがいを感じる。この仕事について、『魔法使いみたいだ』といわれたことがあるが、確かに当たっている部分があるように思う。『柔和な顔がひとしきり大きく崩れた。高校を卒業した時点で

は、まったく別の進路を考えていたが、学ぶなかで持病が悪化し、これ以上続けていくのは無理と判断して断念。20歳の時だった。やりたいことが決まらないまま、鬱々とする日が続いたが、そんな気持ちから抜け出すことになったのは、父・通彦さんの「どうだ、電気を勉強してみないか」というひと言だった。

「考えてみたら、私は小さい頃、家にある機械や電化製品をバラバラにし、それをまた組み立て直すようなことをよくやっていた。それと、電気

旭川で数少ないシステムエンジニア フザ師ぞろいの先輩たちに鍛えられ

は見えないけれど、いろいろな働きをするんだ、面白いものだなと、ずうっと思っていた」という。

旭川高等技術専門学院電子工学科を卒業後、札幌のエンジニアリング会社に就職し、卓抜したワザ師ぞろいの先輩たちの下で本格的にシーケンス制御を学び始めると、ますます「電気の魅力」に取りつかれ、「今になって思うと、それはごく初歩的な集塵機の制御だったのですが、その仕事を任され、一人で仕上げた時の達成感は、得もいわれぬものがありました」。

歳の時にエフ・イー社に入社。用意されたポストは、課員がほかにだれもいない新設のシステム制御課だった。入社後、早速、大きな仕事が続いていた。旭川に工場進出が予定されていた大手食品加工会社の生産ラインの保守・管理を担う技術力を磨くことで、そのため、道外のその食品加工会社本社への派遣を命じられた。その期間は9カ月間に及び、「加工機械が設計される」と、その機械が決められた仕様に従ってどう動くかを図面に起こし、部品を発注して制御盤を製作するのが私の役目ですが、可能な限

り現場の声を聞きながら、それをシステムに反映させていかなければなりません。そうした二つひとつのことを学べたし、私の大きな自信にもなりました」。

若者たちへ

電気は、未知なもので実に面白いものだと思います。目に見えないものなので、どうしても敬遠されがちで、結果的に若い人たちの間にも、システムエンジニアという仕事を知る人はあまり多くありませんが、この仕事をやりはじめ、あらためてそう思うようになりました。

大事なのは想像力

中で機械がこう動くというように想像し、プログラミングします。最終的に頭の中でイメージしていたように機械が動いた時はまさに「やっ

た話からどれだけ想像力を膨らませることができかで、それには当然、人の話をきちんと理解するという能力も求められます。最終的にはやはり「人」としてどうなるのか。(佐々木雄大)